

令和8年度 研究概要

所属名	カリキュラムセンター	研究会議名	個別最適な学び研究会議
年次	1ー1	担当責任者 (茨木 正芳)	担当指導主事 (酒井 朝美・堀江 賢司)
研究員	<u>佐藤 瑞枝 (夢見ヶ崎小学校)</u> <u>伊藤 謙太 (岡上小学校)</u> <u>井川 歩 (金程中学校)</u>		
研究主題	主体的に統合的・発展的な考察ができる児童生徒の育成 ～学習状況調査の分析と活用～		
資質・能力 育成を目指す	主体的に統合的・発展的な考察ができる資質・能力		
研究内容	<p>令和3年1月の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』では、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実し、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。」と示されている。また、学習指導要領解説には「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容については、(中略) 資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることが求められている」と示されている。このことを算数数学に置き換えると、問題の解決を終着点とするのではなく、解決の過程を振り返り、「どんな考え方を働かせたのか」「他にどんなことに活用できるのか」と考える人の育成だと考える。</p> <p>本市の学習状況調査では、「授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている」という質問と、算数・数学の「問題を解いたあとで、もう一度解き方を振り返って、よいところやまちがっているところ、もっと工夫ができることを見つけ出して、自分の解き方を修正したり改善したりしている」という質問に対して、肯定的回答をした児童生徒の割合を見ると、正答数が多い層と少ない層の児童生徒の間にはともに3割前後の大きな差がある。前者の結果からは、算数数学が苦手な生徒ほど、解くための考え方に着目してないことが読み取れる。後者の結果からは、問題解決の過程を振り返り、本質的な条件を見出すことに課題があることが読み取れる。</p> <p>令和7年度の「個別最適な学び研究会議」においても近藤らは課題として、「新しく学んだ内容が既習となるときに、(中略) 積み重ねてきた既習と関連付けるなど統合的に考えたり、新たな視点から捉え直すなど発展的に考えたりする必要がある」と示している。</p> <p>令和7年度の研究や学習状況調査の分析を踏まえ、既習を統合的・発展的に考えるために着目する視点は、「どんな考え方で解決できたのか(着眼点)」と「その着眼点のよさや更なる活用方法を考えられるのか」の2点である。具体的な手だてとしては、児童生徒が振り返りを行う際に「着眼点」と「更に考えてみたいこと」を考えたり、記述したりする場を設定する。これにより、児童生徒が授業で習ったことから新たな問題を発見する学び方を学習する。</p> <p>検証方法としては、授業での児童生徒の取組や振り返りの質、学習状況調査の意識調査を再調査し、分析することで、主体的に統合的・発展的な考察ができる資質・能力の変容について追っていきたい。</p>		